

# 『安樂集』 訳註（一） 第一大門

齊藤隆信・曾和義宏  
加藤弘孝・永田真隆  
小川法道

## 【凡例】

- ・底本（底）には大谷大学図書館蔵順芸本（八～九世紀ごろに書写された高山寺旧蔵本の敷写本）を用いた
- ・校本には下記の二種を用いた
  - ①…元禄一一（一六九八）年刊、義山校本（佛教大学図書館蔵）
  - ②…宝永元（一七〇四）年刊、道章校本（龍谷大学図書館蔵）
- ・底本では読めないと判断した場合に限って校本を用い、その校記を頭註に示した
- ・異体字はすべて正字に改めた
- ・本文と校記は原則として旧字体とし、現代語訳と訳註は新字体とした
- ・その他、『安樂集』の校訂に関しては『大正新脩大蔵経』四七巻、

および『浄土真宗聖典（七祖篇）』（浄土真宗聖典編纂委員会編、一九九二年）を、また書誌に関しては『浄土教典籍目録』（佛教大学総合研究所編、二〇一一年）を参照されたい

・『安樂集』本文中の經典引用に関しては中国仏教研究会『『安樂集』「第一大門」の訳注研究』（『仏教文化研究論集』第四号、財団法人東京大学仏教青年会、二〇〇〇年）、および内藤知康『安樂集講説』（永田文昌堂、一九九九年）を参照した

安樂集卷上 釋道綽撰	『安樂集』卷上 釈道綽撰す
此安樂集一部之内總有十二大門。皆引經論證明、勸信求往。	この『安樂集』一部の内に全部で十二章がある。みな、各章それぞれに經論を引用して、自説を証明とし、信を励まし、往生を求めさせるのである。 <sup>①</sup>
今先就第一大門内、文義雖衆、略作九門料簡、然後造文。	<sup>②</sup> 今、はじめに第一章において、文義は多いが、要約して九節に分類し、その後に解釈する。
①底欠損元宝 「教」	第一節では、教えが興る由来は、「教えが」時代に即して衆生に及ぶことを明らかにして浄土門をよりどころとするように勧めるのである。
第二、據諸部大乘、顯說聽方軌。	第二節では、諸部の大乘の經論によって、法を説く者、法を聴く者の心構えを明らかにする。
②底欠損元宝 「三」	第三節では、大乘の聖教によって、衆生が発心してからの時間、「その間に」供養した仏の数明らかにし、この法会に参集の聴衆を、つとめ励まし発心させる。
③底欠損元宝 「據」	第四節では、諸經に説かれている中心的な教旨が同じではないことを述べる。 <sup>③</sup>
第五、明諸經得名各異。如涅槃、般若經等、就法為名。自有就喻、或有就事、亦有就時、就處。此例非	第五節では、諸經の經題が各々に異なっていることを明らかにする。『涅槃經』、『般若經』などは教えにもとづいて經題としてい

一。今此觀經就人法為名、佛是人名、說觀無量壽是法也。

第六、料簡說人差別。諸經起說不過五種。一者佛自說、二者聖弟子說、三者諸天說、四者神仙說、五者變化說。此觀經、五中世尊自說

第七、略明真應二身、并真應二土。

第八、顯彌陀淨國位該④上下、凡聖通往。

第九、明彌陀淨國、三界攝與不攝。

第一大門中、有明教興所由、約時被機、勸歸淨土者、若教赴時機、易修易悟、若機教時乖、難修難入。

る。譬喩や事物にもとづいて「経題として」いる經典から、時間にもとづいて「経題として」いる經典や、場所にもとづいて「経題として」いる經典までがある。この例は一つではない。今、この『觀經』は人と法にもとづいて経題としており、「仏」は人の名で、「說觀無量壽」は法である。

第六節では、說法する人の相違を分類する。諸經典が説き起こされるには五種類しかない。一つは仏自らの説、二つは仏弟子の説、三つは天界の神々の説、四つは神仙の説、五つは變化人の説である。この『觀經』は五種の説の中では世尊自らの説である。

第七節では、「仏の」真と応の二身及び真と応の二土を簡潔に述べる<sup>(4)</sup>。

第八節では、阿弥陀仏の淨土は「衆生の」階位の上下に関わらず、凡夫も聖者ともに往生することを明らかにする。

第九節では、阿弥陀仏の淨土は、三界に含まれるか否かを明らかにする。

第一章の「第一節の」中に、「<sup>(5)</sup>教えが興る由来は、「教えが」時代に即して、衆生に及ぶことを明らかにして、淨土門をよりどころとするのを勧めるのである」とあるのは、もし教えが時代と機根に合致するならば、修し易く悟り易いが、もしも機根と教えと時が乖離すれば、修し難く悟り難い。

④ ⑤ 欠損 元 宝  
「位該」

是故正法念經云、行者一心求道時、常當觀察時方便。若不得時、無方便、是名為失、不名利。何者。如櫟濕木以求火、火不可得。非時故。若折乾薪以覓火、火不可得。無智故。

是故大集月藏經云、佛滅度後第一五百年、我諸弟子學慧得堅固、第二五百年、學定得堅固、第三五百年、學⑤多聞、讀誦得堅固、第四五百年、造立塔寺、修福懺悔得堅固、第⑥五五百年、白法隱滯多有諍訟、微有善法得堅固。

⑤ 底 欠 損 元 宝  
⑥ 底 欠 損 元 宝  
「第」

又彼經云、諸佛出世有四種法、度衆生。何等為四。一者口說十二部經。即是法施度衆生。二者諸佛如來有無量光明、相好、一切衆生但能繫心觀察、無不獲益。是即身業度衆生。三者、有無量德用、神通道力、種種變化。即是神通力度衆生。四者、諸佛、如來有

だから『正法念處經』（『坐禪三昧經』）では「行者がひたすらに求道する時、常に時と方法を見極めるべきである。もしも時宜を得られず、然るべき方法も無ければ、これを失と言ひ、利とは言えないのである。どうしてもかと言へば、湿った木を錐揉みして火を求めたところで、得ることはできない。それは適切な時ではないからである。また乾いた薪を折り、火を求めたとしても、得ることはできない。それは智慧（適切な方法）をそなえていないからである」と〔時と方法を見極めるべきことを喩えとして〕説いている。

また『大集月藏經』にも、「仏が滅度した後、第一の五百年では、私の弟子たちは智慧を修めて、それを成就し、第二の五百年では、定を修めて、それを成就し、第三の五百年では、多聞、読誦を修めて、それを成就し、第四の五百年では、塔寺を造立し福徳を修め、懺悔して、それを成就し、第五の五百年では、清浄な教えが隠れ滞つたために、多く争ひが起こるが、わずかに善法があるために、それを成就するのである」と〔時代とともに修行と機根が異なることを〕説いている。

またかの經には以下のように説いている。<sup>⑧</sup>すなわち「諸仏が世に現われ、四種の方法によつて、衆生を済度する。何を四種とするのか。一つには口で十二部經を説く。これは法施によつて衆生を済度することである。二つには無量の光明と相好を有しており、一切衆生がよく心を繫け、觀察すれば、必ず利益を獲られる。こ

無量名號、若總、若別、其有衆生繫心稱念、莫不除障獲益、皆生佛前。即是名號度衆生。

⑦底欠損元金

「正」

計今時衆生、即當佛去世後第四五百年、正⑦是懺悔、修福、應稱佛名號時。若一念稱阿彌陀佛、即能除却八十億劫生死之罪。一念既爾、況修常念。即是恒懺悔人也。

又來、若去聖近、時前者修定、修慧是其正學、後者是兼。如去聖已遠、則後者稱名是正、前者是兼。

何意然者。寔由衆生去聖遙遠、機解浮淺、暗鈍故也。

是以韋提自為、及哀愍末世五濁衆生、輪迴多劫徒受痛燒故、能厭離苦緣、諮開出路。

れは身業によつて衆生を済度することである。三つには計り知れない程、神通力の働きがあつて、様々な姿に変化する。これは神通力によつて衆生を済度することである。四つには無量の名号を有しており、通号であれ別号であれ、心を繋げ、称念すれば、必ず障を除き利益を獲て、みなが仏のもとに生じる。これこそ名号によつて衆生を済度することである」と。

現今の衆生を考えてみれば、仏が世を去つて後の第四の五百年に相当しており、まさにこれは懺悔し、福德を修め、仏名を称えるべき時である。もし一念、「阿弥陀仏」と称えれば、すぐさま八十億劫にわたつて輪廻すべき罪を除くことができる。一念であってもこのようであるのだから、まして常に念ずる者は言うまでもない。これこそ常に懺悔する人である<sup>⑨</sup>。

また仏が入滅してからの時間が短ければ、前者の禪定と智慧こそが適切な修行であつて、後者（称名）は併修することになる。もし仏が入滅してから、長い時間が経過したならば、後者の称名こそが適切な修行で、前者は併修するものとなる。

どうしてそのようになるのだろうか。衆生は仏が入滅してから「時間が」遙かに隔たることで、機根が劣り、理解が浅く、道理に暗いからである。

だから韋提希は自身のため、また末世の五濁の衆生が多劫の間、輪廻していたずらに「五つの」痛焼<sup>⑫</sup>（の苦しみ）を受けることを

然大聖弘慈、歎歸極樂。

若欲於斯進趣、勝果難階。唯有淨土一門、可以情忻趣入。

若欲披尋衆典、勸處彌多、遂以採集真言、助修往益。

⑧底欠損(元宝)  
「生者」

何者、欲使前生者⑧導後、後去者昉前、連續無窮。願不休止、為盡無邊生死海故。

第二、據諸部大乘、明説聽方軌者、於中有六。

第一、大集經云、於説法者、作醫王想、作拔苦想。所説之法、作甘露想、作醍醐想。其聽法者、作增長勝解想、作病愈想。若能如是、説者、聽者、皆堪紹隆佛法、常生佛前。

哀愍し、苦縁を厭離させようとして、輪廻を脱する方法を尋ねたのである。

それによつて釈尊は広い慈悲をもつて、極樂をよりどころすることを歎えたのである。

もしこの時代において、修行を続けようとしたところで、勝れた仏果には到達し難い。ただ浄土の一門のみがあつて、衆生が願うままに往生することができるのである。

多数の經典を渉獵しても、浄土の一門を勧めている箇所が多いので、「私道綽は」真実の言葉を集め、往生の利益の備えとするのである。

なぜなら先の往生者に後人を導かせ、後に往生する者には先達を見習わせて、連続して尽きることがないようにするためである。そのように願うのは、限らない輪廻の海を無くすためである。

第二節の「諸部の大乘の經論によつて、法を説く者及び聴く者の心構えを明らかにする」とは、それに六種ある。

第一に『大集經』には、「説法する者は〔自らを〕医王と思ひ、拔苦の者と思うのだ。所説の法を甘露と思ひ、醍醐と思うのだ。聴法する者は勝れた理解が増すと思ひ、病が癒えると思うのだ。もしこのように思うならば、説く者、聴く者はみな、仏法を継承し發揚して、常に仏前に生まれるだろう」と説かれている<sup>(13)</sup>。



二、大智度論云、聽者端視如渴飲、一心入於語義中、聞法踊躍心悲喜、如是之人應為說。

三、彼論又云、有二種人、得福無量無邊。何等為二。一者樂說法人、二者樂聽法人。是故阿難白佛、舍利、目連、何以所得智慧、神通、於聖弟子中最為殊勝。佛告阿難此之二人因中時、為法因緣千里不難。是故今日最為殊勝。

四、無量壽大經云、若人無善本、不得聞此經、清淨有戒者、乃獲聞正法。

五云、曾更見世尊、則能信此事、奉事億如來、樂聽如是教。

六者、無量清淨覺經云、善男子、善女人、聞說淨土法門、心生悲喜、身毛為豎、如拔出者、當知此人過

第二に『大智度論』には、「聽く者は、「法を説く者を」よく見て、あたかも喉が渴いている人が「水を求めるように」ひたすら言葉の意味に集中し、法を聴いて踊り出すほどに心は悲喜する。このような人に法を説くべきである」と説かれている<sup>14</sup>。

第三に『大智度論』に以下のように述べられている。すなわち「二種の人がいて、福德を得ること無量無辺である。何を二種とするのだろうか。一つには法を説くことを願う人であり、二つに法を聴くことを願う人である。だからこそ阿難は仏に「舍利〔弗〕と目連はどうして獲得した智慧、神通が声聞弟子の中で最も勝れているのでしょうか」と問うと、仏は「この二人は修行中、法のために千里の道も厭わなかった。このために今、最も勝れたものになったのだ」とお答えになった<sup>15</sup>」と。

第四に『無量壽經』には、「善根が無い人は、この經を聞くことができないが、持戒清淨な人は正法を聞くことができる<sup>16</sup>」と説かれている。

第五に『無量壽經』には「かつて世尊にまみえた者は、よくこのことを信じてことができ、数限りない如來を信奉した者は、このような教えを聴こうと願う<sup>17</sup>」と説かれている。

第六に『無量清淨平等覺經』には、以下のように説かれている。すなわち「善男子、善女人が淨土の法門を聞いて、悲喜の思いが

去宿命、已作佛事也。若復有人、聞説浄土法門、都不生信者、當知此人始從三惡趣道來、殃咎未盡、為此無信向耳。我說<sup>⑨</sup>此人未可解脫也。是故無量壽大經云、憍慢弊懈怠、難以信此法。

生じて、全身の毛が逆立つて抜け出るようであるならば、この人は、過去世において、すでに仏道を修めていたと知るべきである。もしまた浄土の法門が説かれているのを聞いても、全く信が生じないならば、この人は始め三惡趣より来て、わざわざいまだに尽きておらず、このために帰依の心が無いのである。私は言いたい。この人はいまだに解脫を得られない<sup>⑮</sup>と。このために『無量壽經』には、「驕慢で、懈怠であるならば、この法を信じることができない<sup>⑮</sup>」と説いているのである。

第三、據大乘聖教、明衆生發心久近供佛多少者、如涅槃經云、佛告迦葉菩薩、若有衆生、於半恒河沙等諸佛所<sup>⑩</sup>、發菩提心、然後乃能於惡世中、聞是大乘經典、不生誹謗。若有於一恒河沙等佛所、發菩提心、然後乃能於惡世中、聞經不起誹謗、深生愛樂。若有於二恒河沙等佛所、發菩提心、然後乃能於惡世中、不謗是法、正解信樂、受持、讀誦。若有於三恒河沙等佛所、發<sup>⑪</sup>菩提心、然後乃能於惡世中、不謗是法、書寫經卷、雖為人説、未解深義。

第三節の、「大乘の聖教によつて、衆生が發心してからの時間、〔その間に〕供養した仏の数を明らかにする<sup>⑮</sup>」とは、『大般涅槃經』に「仏が迦葉菩薩に（もし半恒河沙ほどの諸仏のもとで菩提心を發したのなら、その後は惡世の中でこの大乘經典を聞いて誹謗〔の心〕を生じることがない。もし一恒河沙ほどの諸仏のもとで菩提心を發したならば、その後は惡世の中で教え〔經典〕を聞いて誹謗〔の心〕を起こすことが無く、深く愛樂〔の心〕が生じる。もし二恒河沙の諸仏のもとで菩提心を發したならば、その後は惡世の中でこの法を謗らず、正しく理解し信樂し、受持し、讀誦できる。もし三恒河沙ほどの諸仏のもとで菩提心を發したならば、その後は惡世の中でこの法を謗らず、經卷を書寫して、人に説くことができるが、いまだ奥深い意味を理解しない<sup>⑮</sup>と仰せになった<sup>⑮</sup>」と説かれている。

何故須如此教量者、為彰今日座下聞經者、曾已發心

どうしてこのような教量を用いるのかと言え、今日の法筵で教



供養多佛也。又顯大乘經之威力不可思議。是故經云、若有衆生、聞是經典、億百千劫不墮惡道。何以故。是妙經典所流布處、當知其地即是金剛、是中諸人亦如金剛。故知聞經生信者、皆獲不可思議利益也。

第四、次辨諸經宗旨不同者、若依涅槃經、佛性為宗、若依維摩經、不可思議解脫為宗、若依般若經、空慧為宗、若依大集經、陀羅尼為宗。今此觀經以觀佛三昧為宗。若論所觀、不過依正二報。如下依諸觀所辨。

若依觀佛三昧經云、佛告父王、諸佛出世有三種益。一者、口說十二部經、法施利益、能除衆生無明暗障、開智慧眼、生諸佛前、早得無上菩提。

え（經典）を聞く者は、かつて発心して多仏に供養したことを明らかにする為である。また大乘經典の威力が計り知れないことを明らかにするのである。それだから、『大般涅槃經』には「もしこの教え（經典）を聞いたならば、億百千劫の間、惡道に墮ちない。どうしてであろうか。この妙なる教え（經典）が流布するところは、その地が金剛であって、その人々も金剛のようなことを知るであろう。このために教え（經典）を聞いて信を生じる者は、みな計り知れない利益を獲るのである<sup>(24)</sup>」と説かれるのである。

第四節に「諸經に説かれる教旨が同じではないことを述べる」とは、『大般涅槃經』によれば仏性を教旨とし、『維摩經』によれば計り知れない解脫を教旨とし、『般若經』によれば、空慧を教旨とし、『大集經』によれば陀羅尼を教旨とする。いまこの『觀經』は觀佛三昧を教旨とするのである。觀察する対象について述べるならば、依報と正報の二報に過ぎない。それは以下のように諸觀に述べられている。

『觀佛三昧海經』によるならば、次のようにある。すなわち「仏は父王に告げられた。諸佛の出世には三種の利益がある。一つには、口に十二部經を説く法施の利益であって、衆生の無明を除き、智慧の眼を開き、諸佛の現前に生まれ、すぐさまこの上ない菩提を獲得させることができる。

二者、諸佛、如來有身相光明無量妙好。若有衆生稱念觀察、若總、若別、無間佛身現在、過去、皆能除滅衆生四重、五逆、永背三途、隨意所樂、常生淨土、乃至成佛。

三者、今、勸父王行念佛三昧。父王白佛、佛地果徳、眞如實相第一義空、何因不遣弟子行之。佛告父王、諸佛果徳有無量深妙境界、神通解脫、非是凡夫所行境界、故勸父王行念佛三昧。父王白佛、念佛之功、其狀云何。佛告父王、如伊蘭林方四十由旬、有一科牛頭梅檀、雖有根牙、猶未出土。其伊蘭林、唯臭無香、若有噉其花果、發狂而死。後時梅檀根牙漸漸生長、纔欲成樹、香氣昌盛、遂能改變此林、普皆香美、衆生見者、皆生希有心。佛告父王、一切衆生在生死中、念佛之心亦復如是。但能繫念不止、定生佛前。一得往生、即能改變一切諸惡、成大慈悲。如彼香樹改伊蘭林。

二つには、諸仏、如來には身体の相と光明と数限りない素晴らしい好がそなわっている。称念、觀察するならば、「それが」全体の相であろうと、個別の相であろうと、また現在仏と過去仏とに関わりなく、すべて衆生の四重五逆の罪を除き、永く三途を離れて、願うままに淨土に生まれ、成仏することができる。

三つには今、父王に念仏三昧を行ずることを勧める。父王は仏に「仏地の功徳は眞如、実相、第一義空であるのに、どういう訳で弟子にこれを行じさせないのですか」と申し上げた。仏は父王に「諸仏の功徳にはこの上なく深い境地、神通、解脫があり、これは凡夫が行ずる境地ではないので、父王には念仏三昧を行ずることを勧めるのである」とお答えになった。父王は仏に「念仏の功徳とはどのようなものでしょうか」と申し上げた。仏は父王に「四十由旬四方の伊蘭林に、牛頭梅檀が一つあり、その根芽があったとしても、いまだ土中から出ていない。その伊蘭林にはただ臭気があつて香気がなく、もしその花の実を食べたならば、發狂して死んでしまうだろう。その後梅檀の根芽がじょじょに成長して、樹木になろうとする時、香気が満ち溢れ、ついには伊蘭林を変化させ、至る所、香気が麗しく、見る者はみな希有な心を生じるのである」とお答えになった。「更に」仏は父王に「一切の衆生が輪廻の中で、念仏する心もまたこのようなものである。念を繋いで中断しなければ、必ず仏の前に生じる。ひとたび往生できたならば、一切の諸悪を変化させ、大慈悲を成就する。かの香

所言伊蘭林者、喻衆生身内三毒三障無邊重罪、言梅檀者、喻衆生念佛之心、纔欲成樹者、謂一切衆生、但能積念不斷、業道成辦也。

問曰、計一衆生念佛之功、亦應可知。何因一念之力、能斷一切諸障。如一香樹、改四十由旬伊蘭林、悉使香美也。

答曰、依諸部大乘、顯念佛三昧功能不可思議也。何者、如華嚴經云、譬如有人用師子筋以為琴絃、音聲一奏、一切餘絃悉皆斷壞。若人菩提心中行念佛三昧者、一切煩惱、一切諸障、悉皆斷滅。亦如有人搆取牛、羊、驢、馬一切諸乳置一器中、若將師子乳一滌投之、直過無難、一切諸乳悉皆破壞、變為清水。若人但能菩提心中行念佛三昧者、一切惡魔、諸障、直過無難。

樹が伊蘭林を改めたように」とお答えになった<sup>(26)</sup>と。

「伊蘭林」とは衆生の身中の三毒、三障、限りない重罪に譬え、「梅檀」とは衆生の念仏する心に譬え、「樹木になろうとする時」とは一切の衆生が絶え間なく念仏すれば修行が完成するという意味である。

問う。衆生の念仏の功能（はたらき）については（以上のように）理解すべきである。それではどうしてわずか一念の力が、障りを断じることが可能なのか。それは一本の香樹（梅檀）によって四十由旬四方の伊蘭林が、ことごとく香氣になることと等しいというのか。

答える。諸部の大乘〔經典〕によって、念仏三昧の機能が不可思議であることを明らかにしよう。どういうことかと言え、『華嚴經』に説かれる通りである。すなわち「たとえある人が獅子の筋を用いて琴弦として、音楽を一たび奏したならば、一切の弦は切れてしまうだろう。もしある人が菩提心を備えて、念仏三昧を行じたならば、一切の煩惱や障りはみな断滅するのである。またある人が牛、羊、驢、馬全ての乳を搾り一つの器の中に入れて、獅子の乳を一滴投じたならば、直ちに通り抜けて混じることはなく、〔そればかりか〕一切の乳は〔その性質が〕壊れてしまい、清水に変化するのである。もし人が菩提心を備えて念仏三昧を行じることができるならば、一切の悪魔、障りは直ちに通りすぎて

又云、譬如有持翳身藥、處處遊行、一切餘人不見是人。若能菩提心中行念佛三昧者、一切惡神、一切諸障不見是人。隨所詣處、無能遮障。何故能爾。此念佛三昧即是一切三昧中王故也。

第七、略明三身三土義。問曰、今現在阿彌陀佛是何身。極樂之國是何土。

答曰、現在彌陀是報佛、極樂莊嚴國是報土。然古舊相傳皆云、阿彌陀佛是化身、土亦是化。此為大失也。若爾者、穢土亦化身所居、淨土亦化身所居者、未審如來報身更依何土也。

今依大乘同性經辨定報化淨穢者、經云、淨土中成佛者悉是報身、穢土中成佛者悉是化身。

障げられることが無い<sup>(27)</sup>」と。

また「たとえばある人が身を隠す薬を持って、あちこちに遊行したならば、誰もこの人を見ることができない。もし菩提心を備えて念仏三昧を行じることができれば、一切の悪神、一切の障りはこの人を見ることはない。どこへ行ったとしても、妨害することはできない<sup>(28)</sup>」と説かれている。どうしてこのようなことが可能なのか。「それは」この念仏三昧は一切の三昧の王だからである。

第七節<sup>(29)</sup>として、三身三土の意味を簡潔に述べる。問う。今、現に在す阿彌陀仏はどのような仏身であるのか。極樂とはいかなる国土であるのか。

答える。現に在す阿彌陀仏は報仏であり、極樂という飾り立てられた国は報土である。けれども古くから、みな「阿彌陀仏は化身であり、国土もまた化土である」と伝えている。これは大いなる錯誤である。もしそうだとするならば、穢土も化身の居場所であり、淨土も化身の居場所ということになる。それならば、一体、如來の報身は何なる国土を拠り処（居場所）とするのかわからなくなってしまう。

今、『大乘同性經』にもとづいて報・化、淨・穢を判定すれば、經に「淨土の中で成仏する者は、全て報身であり、穢土の中で成

彼經云、阿彌陀如來、蓮華開敷星王如來、龍主王如來、寶德如來等諸如來、清淨佛刹、現得道者、當得道者、如是一切皆是報身佛也。

何者如來化身。由如今日踊戒屬如來、魔恐怖如來。如是等一切如來、穢濁世中、現成佛者、當成佛者、從兜率下、乃至住持一切正法、一切像法、一切滅法。如是化事皆是化身佛也。

何者如來法身。如來真法身者、無色、無形、無現、無著、不可見、無言無說、無住處、無生、無滅。是名真法身義也。

問曰、如來報身常住、云何觀音授記經云、阿彌陀佛入涅槃後、觀音次補佛處也。

答曰、此是報身示現隱沒相、非滅度也。彼經云、阿

仏する者は全て化身であるのだ」と説かれている通りである。

〔また〕『大乘同性經』には、以下のように説かれる。すなわち「阿彌陀如來、蓮華開敷星王如來、龍主王如來、寶德如來などの如來は清淨なる仏土において、現世に仏道を成就している者、未來に仏道を成就するであろう者であつて、これらは全て報身仏なのである。

何が如來の化身なのだろうか。たとえば今日の踊戒屬如來、魔恐怖如來のような仏である。このような一切の如來は、けがれた世の中において現世で成仏する者、未來に成仏する者であつて、〔みな〕兜率天から降りて、一切の正法、一切の像法、一切の滅法（末法）を護持する。このような變化の事相〔をあらわす仏〕はみな化身仏なのである。

何が如來の法身なのだろうか。如來の眞實の法身とは、色はなく、形はなく、現れることはなく、明らかとなることはなく、見ることはできず、言も説もなく、住することはなく、生じることなく、滅することはない。これを眞實の法身の意味とする<sup>30)</sup>と。

問う。如來の報身は常住であるのに、どうして『觀世音菩薩授記經』には「阿彌陀仏が涅槃に入った後に、觀音菩薩が次に仏地を補う<sup>31)</sup>」と説いているのだろうか。

答える。これは報身が隱沒の相を示しているのであつて、滅度



彌陀佛入涅槃後、復有深厚善根衆生、還見如故。即其證也。又寶性論云、報身有五種相、說法及可見、諸業不休息及休息隱沒、示現不實體、即其證也。

問曰、釋迦如來報身、報土在何方也。

答曰、涅槃經云、西方去此四十二恒河沙佛土、有世界名曰無勝。彼土所有莊嚴亦如西方極樂世界、等無有異。我於彼土出現於世、為化衆生故、來在此娑婆國土。非但我出此土、一切如來亦復如是。即其證也。

問曰、鼓音經云、阿彌陀佛有父母。若有父母、明知非是報佛報土也。

答曰、子但聞名、不究尋經旨、致有此疑。可謂錯之毫毛、失之千里。然阿彌陀佛亦具三身。極樂出現者、即是報身、今言有父母者、是穢土中示現化身父母也。

「のこと」ではないのである。『觀世音菩薩授記經』に、「阿彌陀仏が涅槃に入つた後も、深い善根を積んだ衆生は、以前と変わらず「仏を」見る<sup>③</sup>」と説かれているのが、その教証である。また『究竟一乘宝性論』には「報身に五種の相がある。説法すること、実見できること、諸々の働きが停止しないこと、働きを停止して隠没すること、実体でないものを示現することである<sup>④</sup>」と説かれていることも、その教証である。

問う。釈迦如來の報身・報土はどこにあるのだろうか。

答える。『大般涅槃經』には以下のように説かれている。すなわち「ここから西方に四十二恒河沙の仏土を過ぎると、無勝という世界がある。その国土のあらゆる莊嚴もまた西方極樂世界と等しく異なりが無い。私はその国土（浄土）で世に現れたが（報身）、衆生を教化する為に（化身となって）、この娑婆国土（穢土）に来たのである。私のみがこの国土に現れたのではなく、一切の如來も同様であるのだ<sup>⑤</sup>」と。これこそがその教証となる。

問う。『阿彌陀鼓音声王陀羅尼經』には、阿彌陀仏に父母がいると説かれている。父母がいるならば、報仏・報土ではないことは明白である。

答える。あなたは「父母の」名前を聞いただけで經旨を追い求めないから、そのような疑義が生じるのである。わずかのまちがえが大きな誤解に至ったと言うべきである。阿彌陀仏も三身を具え



亦如釋迦如來、淨土中成其報佛、應來此方示有父母、成其化佛。彌陀佛亦如是。

又如鼓音經云、爾時阿彌陀佛與聲聞衆俱、國號清泰、聖王所住、其城縱廣十千由旬。阿彌陀佛父是轉輪聖王、王名月上、母名殊勝妙顏、魔王名無勝、佛子名目明、提婆達多名寂、給侍弟子名無垢稱。又上來所引竝是化之相、若是淨土、豈有輪王及城女人等也。此即文義昞然、何待分別。皆不善尋究、致使迷必生執也。

⑫底「城」⑬元  
「成」

問曰、若報身有隱沒休息相者、亦可淨土應有成⑫壞事。

答曰、如斯難者、自古將今、義亦難通。然今敢引經為證、義亦可知。

譬如佛身常住、衆生見有涅槃。淨土亦爾、體非成壞、

ている。極樂に出現したのは報身なのであり、今、「父母がいる」と言うのは、穢土の中で化身を示現した時の父母である。また釈迦如來が淨土の中では報仏となり、この穢土に来て父母がある時には化仏となったように阿彌陀仏もこれと同じなのである。

また『阿彌陀鼓音声王陀羅尼經』には、以下のように説かれている。すなわち「その時、阿彌陀仏は声聞たちと共におり、国土は清泰と称し、轉輪聖王が居住する王城〔の広さ〕は一万由旬四方だった。阿彌陀仏の父は轉輪聖王であり、月上と称し、母は殊勝妙顏と称し、魔王は無勝と称し、仏の子供は目明と称し、提婆達多は寂と称し、給仕の弟子は無垢称と称した」と。ここに引いた經文は全て化の相であり、もしこれが淨土であるならば、どうして轉輪聖王や王城や女人などが存在するのであるか。このように經文の意味は明らかなのであり、解説するまでもない。みなよく調べて考えないから、正しい判断ができず、決まって「誤った解釈に」とらわれてしまうのである。

問う。もし報身に隠れたり、その働きを停止する相があるならば、淨土に成と壞の事象があるということになるに違いない。

答える。このような疑難は古來より今まで〔あつて〕、道理として通じ難い。今、あえて經文を引いて教証とするので、その道理を知るべきである。

たとえば仏身は常住であるが、衆生は〔仏身に〕涅槃があるのを

⑬底「戲」⑤宝  
「虧」

隨衆生所見有成有壞。如華嚴經云、由如見導師、種種無量色、隨衆生心行、見佛刹亦然。是故淨土論云、一質不成故、淨穢有虧⑬盈。異質不成故、搜原則冥一。無質不成故、緣起則萬形。故知若據法性淨土、則不論清濁、若據報化大悲、則非無淨穢也。

又汎明佛土、對機感不同、有其三種差別。

一者、從真垂報。名為報土。猶如日光照四天下、法身如日、報化如光。

⑭底「之」⑤宝

二者、無而忽有。名之為化。即如四分律云、定光如來化提婆城與拔提城相近、共為親婚往來。後時忽然化火燒却、令諸衆生觀此無常、莫不生厭歸向佛道也。是故經云、或現劫火燒、天地皆洞然、衆生有常想、照令知無常。或為濟貧乏⑭、現立無盡藏、隨緣廣開

見る。淨土もこのようなものであり、実体は成壊しないが、衆生  
の見る作用によって成があり、壊があるのだ。『華嚴經』に「た  
とえば導師（仏）の種々無量のすがたを見るのは、衆生の心の作  
用によっているように、仏国土を見るのも同様である」と説かれ  
ている。このため『淨土論』には、③「仏国土は」同一であること  
は成立しないので、淨穢や盛衰がある。異質であることは成立し  
ないので、もとを突き詰めれば一となる。無質であることは成立  
しないので、縁によって万物となる」と説かれているのである。  
これらにより法性淨土の場合は、清濁を論じる対象ではなく、大  
悲を具えた報身・化身の場合は、その国土に淨穢が無いという訳  
では無いと知るのである。

また仏土に、機感が同じではないことによって、三種の差異があ  
ることを広く明かす。③

一つには真（眞法身）③より報を示現する。これを報土と言う。あ  
たかも太陽の光が四方を照らすように、法身は太陽のようであり、  
報〔身〕・化〔身〕は光のようである。

二つには、無からたちまち有となる。これを化と言うのである。  
すなわち『四分律』に説かれるがごとくである。「定光如來が化  
現させた提婆城は拔提城と近接しており、姻戚關係を結び交流し  
ていた。その後、にわかに火を化現して〔提婆城を〕焼却し、  
〔拔提城の〕衆生にこの無常を見せることで、〔愁憂を〕厭う思

「乏」

導、令發菩提心。

三者、隱穢顯淨。如維摩經、佛以足指按地、三千刹土莫不嚴淨。

今此無量壽國即是從真垂報國也。何以得知。依觀音授記經云、未來觀音成佛、替阿彌陀佛處。故知是報也。

⑮ ⑥ 欠損 ⑦ 宝

「凡」

第八、明彌陀淨國位該上下、凡聖通往者、今此無量壽國是其報淨土、由佛願故、乃該通上下、致令凡⑮夫之善竝得往生。由該上故、天親、龍樹及上地菩薩亦皆生也。是故大經云、彌勒菩薩問佛、未知此界有幾許不退菩薩、得生彼國。佛言、此娑婆世界有六十億不退菩薩、皆當往生。若欲廣引、餘方皆爾。

いを生じ、必ず仏道に帰依させるようにするのである<sup>④</sup>」と。このために『維摩詰所説經』には「あるいは壞劫の大火が燃え、天地がみな焼き尽くされるのを現出し、常住の思いを為す衆生に、明らかに無常を覚知させるのである。あるいは貧困〔の者〕を救うために、無尽の蔵を設置し、条件に応じてあまねく教え導き、菩提心をおこさせるのである<sup>⑫</sup>」とある。

三つには、穢を隠し、淨をあらわす仏土である。『維摩詰所説經』に「仏が足の指で地をさすると、三千の国土はみな飾り立てられ、清らかになった<sup>⑬</sup>」と説かれるごとくである。

今、この無量壽國は真より報を示現した国土である。どうしてそれを知ることができるのだろうか。『觀世音菩薩授記經』に「未來に觀音菩薩が成仏して阿彌陀仏の位に替わる<sup>⑭</sup>」と説くのである。そういう訳でこれは報なのである。

第八節として、「阿彌陀仏の淨土は〔衆生の〕階位の上下に関わらず、凡夫も聖者ともに往生することを明らかにする」とは、今、この無量壽國は報の淨土であるが、仏願によって、上下に広く通じており、凡夫の修める善によってもみな往生できるのである。上位を包括することによって、天親、龍樹や上地の菩薩（不退転の菩薩）もみな往生するのである。このような訳で『無量壽經』には、以下のように述べられる。すなわち「彌勒菩薩が仏に〔この世界にはどれほどの不退転の〔境地に達した〕菩薩がおり、

⑬底「想」元宝  
「相」

問曰、彌陀淨國既云位該上下、無間凡聖皆通往者、未知唯修無相得生。為當凡夫有相⑭亦得生也。

答曰、凡夫智淺、多依相求、決得往生。然以相善力微、但生相土、唯觀報化佛也。

⑮底欠損元宝  
「當」

是故觀佛三昧經、菩薩本行品云、文殊師利白佛言、當⑮知我念過去無量劫數為凡夫時、彼世有佛、名寶威德上王如來。彼佛出時、與今無異。彼佛亦長丈六、身紫金色、說三乘法、如釋迦文。

爾時彼國有大長者、名一切施。長者有子、名曰戒護。子在母胎時、母以敬信故、預為其子受三歸依。子既

かの国に生まれるのでしょうか」と問うと、仏は以下のように答えられた。〈この娑婆世界には六十七億の不退転の〔境地に達した〕菩薩がおり、みな往生するだろう。もしひろく〔事例を〕引くならば、他の仏国土もみな同様なのである<sup>⑬</sup>〉と。

問う。阿弥陀仏の浄土が、階位の上下を包括しており、凡夫と聖者とに関わらず、みな往生すると言うのなら、果たしてただ無相を修する者だけが往生できるのか、それとも有相を修める凡夫も往生できるのか。

答える。凡夫の智慧は浅く、多くは有相を拠りどころとして修めれば、必ず往生できるのである。しかし有相を修める善の力は微かであるので、ただ有相の国土に生まれて、報仏と化仏を見るだけである。

このために『観仏三昧海経』菩薩本行品には以下のように説かれている。すなわち「文殊師利は仏に申し上げた。〈私が過去無量劫数の間、凡夫だった時のことを思えば、かの世には仏がおり、宝威德上王如来とおっしゃいました。かの仏が出世した時は、今と異なるところがありませんでした。かの仏も身長は一丈六尺であり、身体は紫金色であり、三乗の法を説き、釈迦のようでありました。

その時、かの国土に大長者がおり、一切施といいました。長者には子があり、戒護といいました。戒護が母胎にいた時、母は「仏

生已、年至八歳、父母請佛於家供養。童子見佛、為佛作禮、敬佛心重、目不暫捨。一見佛故、即得除却百萬億那由他劫生死之罪。

從是以後常生淨土、即得值遇百億那由他恒河沙佛。

⑮底「二」元金

「一一」

⑮底なし元「以此」金「以」

是諸世尊亦以相好度脫衆生。爾時童子一一親侍、間無空缺、禮拜、供養、合掌、觀佛。以⑮因緣力故、復得值遇百萬阿僧祇佛、彼諸佛等亦以色身相好化度衆生。

從是以後即得百千億念佛三昧門、復得阿僧祇陀羅尼門。既得此已、諸佛現前、乃為說無相法、須臾之間得首楞嚴三昧。時彼童子但受三歸、一禮佛故、諦觀佛身、心無疲厭。由此因緣、值無數佛。何況繫念、具足思惟觀⑮佛色身。時彼童子豈異人乎。是我身也。

⑮底「親」元金「觀」

を」敬信していたので、あらかじめ三歸依を受けました。戒護が生まれ、八歳になると、父母は仏を家に招いて供養しました。戒護は仏を見ると礼拝し、敬うこと丁重であり、一時の間も目を離しませんでした。ひとたび仏を見たことによって、百万億那由他劫にわたって輪廻すべき罪が除かれました。

これより以後は、常に淨土に生まれ、百億那由他恒河沙ほどの仏たちに出会うことができました。この諸々の世尊「たち」も、「種々の」相好によって、衆生を解脱に導いたのです。その間、戒護は「世尊」一人ひとりに仕えて、絶えず礼拝し、供養し、合掌し、仏を観察したのです。この因縁のために、百万阿僧祇ほどの仏たちに出会うことができ、それらの諸仏も色身の相好によって衆生を済度したのです。

これより以後は、速やかに百千億の念仏三昧門を得て、また阿僧祇の陀羅尼門を得ました。これを得た後に、諸仏が現前し、「戒護のために」無相の法を説き、「戒護は」すぐさま首楞嚴三昧を得ました。その時のかの戒護は、ただ三歸依を受けて、ひとたび仏を礼拝したことによって、仏身を子細に観て、厭倦「の思い」が無くなったのです。この因縁によって無数の仏たちに出会うことになったのです。ましてや念を繋げて、十分に思惟し、仏の色身を観ずることは言うまでもないことでしょう。その時の戒護は他でもありません。この私（文殊師利）だったのです」。



②① 底 「勤」 元  
「勤」 元 「勤」

爾時世尊讚文殊言、善哉、善哉。汝以一禮佛故、得值無數諸佛。何況未來我諸弟子勤②①觀佛者、勤念佛者。

②② 底 「夫」 元 宝  
「末」

佛勅阿難、汝持文殊師利語、遍告大衆及末②②來世衆生、若能禮佛者、若能念佛者、若能觀佛者、當知此人與文殊師利等無有異、捨身他世、文殊師利等諸菩薩為其和上。

②③ 底 「去」 元 宝  
「土」

以此文證、故知淨土該通相土②③、往生不謬。若知無相離念為體、而緣中求往者、多應上輩生也。

是故天親菩薩論云、若能觀二十九種莊嚴清淨、即略入一法句。一法句者、謂清淨句。清淨句者、即是智慧無為法身故。何故須廣略相入者、但諸佛菩薩有二種法身。一者法性法身、二者方便法身。由法性法身故、生方便法身、由方便法身故、顯出法性法身。此二種法身異如不可分、一如不可同。是故廣略相入。菩薩若不知廣略相入、則不能自利利他。

その時、世尊は文殊師利を讃えて、〈善いぞ、善いぞ。汝はひとたび仏を礼拝することで、無數の諸仏に出会うことができた。ましてや未來世において、私の諸々の弟子たちの中で、勤めて仏を觀る者や仏を念ずる者は言うまでもないであろう〉と告げられた。仏は阿難に〈あなたは文殊師利の言葉をよく記憶して、あまねく大衆や未來世の衆生に、仏を礼拝できる者や仏を念ずる者や仏を觀ずる者、これらの人々は文殊師利と異なるところがなく、命が尽きた後の世で、文殊師利ら諸菩薩が〔彼らの〕師になるだろうと告げなさい〉と命じた<sup>④⑤</sup>。

この文を証拠として、淨土が相土を包括しており、〔有相を修める凡夫の〕往生は誤りではないとわかるのである。もし無相離念をもつて淨土の本体と知り、〔その上で阿弥陀仏を信じるという〕因縁の中で往生を求める者は、多く〔のもの〕が上輩として往生するだろう。

このために天親菩薩（世親）の『往生論』には、次のように述べられている。すなわち「もし二十九種莊嚴の清淨を觀ずることができるならば、みな、一法句に入る。<sup>⑤①</sup>一法句とは、清淨句のことを言う。清淨句なのは智慧、無為、法身だからである。どうして広（二十九種莊嚴）と略（一法句）が相互に包含し作用するのかと言え、諸々の仏や菩薩には二種の法身がある。<sup>⑤②</sup>一つには法性の法身であり、二つには方便の法身である。法性の法身によるの



無為法身者、即法性身也。法性寂滅故、即法身無相也。法身無相故、則能無不相。是故相好莊嚴即是法身也。法身無知故、則能無不知。是故一切種智即是真實智慧也。雖知就緣觀總別二句、莫非實相也。以知實相故、即知三界衆生虛妄相也。以知三界衆生虛妄故、即起真實慈悲也。以知真實慈悲故、即起真實歸依也。

②④底「帝」①元全  
「諦」

今之行者無問縑素、但能知生無生不違二諦<sup>②④</sup>者、多應落在上輩生也。

第九、明彌陀淨國、三界攝與不攝。問曰、安樂國土於三界中、何界所攝。

で、方便の法身を生じ、方便の法身によるので、法性の法身を顯し出すのである。この二種の法身は差異が不可分のようであり、一でありながら同じでもない。このために広と略が相互に包含し作用するのである。菩薩がもしこれを知らないならば、自利、利他〔の行〕を實踐できない。

無為の法身とは、法性身（法性法身）のことである。法性は寂滅しているので、法身は相（決まった姿形のこと）がない。法身は相が無いので、様々な相となるのである。このために相好や莊嚴も法身なのである。法身は知（定まった智慧）が無いので、あらゆる智慧となる。このためにあらゆることを知る智慧は、真實の智慧である。〔龍樹、世親などの上輩生の菩薩が〕因縁に従って総（一法句）、別（二十九種莊嚴）の二句をそれぞれに觀ずることを知ると言っても、どちらも実相なのである。実相を知ることによって、三界の衆生の虚妄の相を知る。三界の衆生の虚妄の相を知ること、真實の慈悲が起る。真實の法身<sup>③</sup>を知ること、真實の歸依が起るのである<sup>⑤④</sup>と。

今の行者は僧俗に関わらず、生、無生を知って、二諦に違わないならば、多く〔のもの〕が上輩として往生するだろう。

第九節として、阿弥陀仏の淨土は、三界に含まれるか含まれないのかを明らかにする。問う。安樂國土は三界の中では、どこに含まれるのか。

②⑤底「為」元宝  
「偽」

答曰、淨土勝妙、體出世間。此三界者、乃是生死凡夫之暗宅。雖復苦樂殊、修短有異、統如觀之、莫非有漏之長津。倚伏相乘、修環無際、雜生觸受四倒長溝、且因且果、虛偽②⑤相習、深可厭也。是故淨土非三界攝。

又依智度論云、淨土果報無欲故非欲界、地居故非色界、有形色故非無色界。雖言地居、精勝妙絕。

是故天親論云、觀彼世界相、勝過三界道、究竟如虛空、廣大無邊際。

是故大經讚云、妙土廣大超數限、自然七寶所合成、佛本願力莊嚴起、稽首清淨大攝受。世界光耀妙殊絕、適悅晏安無四時、自利利他力圓滿、歸命方便巧莊嚴。

答える。淨土は極めてすぐれており、輪廻を超脱している。この三界は生死を繰り返す凡夫の暗い住処である。苦樂にわずかに區別があり、寿命に異なりがあったとしても、総じて観れば煩惱の大河であるのは間違いない。禍と福が互いに起こり、際限がなく、繰り返し輪廻をして道理に背く四つの見解に捕らわれて長い溝に陥り、因や果によって虚偽が染みつくことは、深く厭うべきなのである。このために淨土は三界に含まれないのである。

また『大智度論』には、「淨土の果報は欲がないので、欲界ではなく、地にあることから色界ではなく、形があるので無色界ではない」<sup>⑤⑥</sup>と説かれている。地にあると言っても、極めてすぐれている。

このために天親菩薩の『往生論』には、「かの世界の相を觀じたならば、三界を超越し、詰まるところは、虚空のようであり、廣大で限りがない」<sup>⑤⑦</sup>と説かれるのである。

このために「曇鸞の」『讚阿弥陀仏偈』には、「淨土は広大で数量の限りを超えており、おのずから七宝で合成され、仏の本願の働きによって飾られている。「そのような」清浄にして衆生を摂めとる世界に礼拝稽首する。世界の光の輝きは殊に超絶しており、安樂で四季がなく、自利利他のはたらきが完全に具わっている。「そのような」巧みな手立てで飾られている世界に帰命する」<sup>⑤⑧</sup>と云うのである。

註

- (1) 「勸信求往」に関連する文言としては、第三大門に「勸後代生信求往」、「勸信求生」、第五大門に「勸後代生信求往」などの用例が見える。
- (2) 『安樂集』にはこのほかにも「今、此の觀經は」「今、觀經は」「今日、座下に經を聞く者は」など、「今」が多用されている。これは本書が当座の四衆を対象としていたことを窺わせる表現である。伝記によると道綽は『觀經』を二百回講義したと言われる。こうした講經の成果として『安樂集』が成立したことを推察させるものである。
- (3) 第四 宗旨の不同、第五 諸經の得名、第六 説人の差別は、淨影寺慧遠の説を参考に行っているものと考えられる。例えば淨影寺慧遠『觀經義疏』では、冒頭に「五要」を挙げて解説しているが、その第三に經の宗趣、第四に經名の異同、第五に説人の差別を挙げている（『大正藏』第三七卷、一七三上）。
- (4) なお本文には「二身二土」への具体的な言及はなく、「三身三土」の問題が扱われている。
- (5) 「大門」は他の用例に見当たらない為、衍字の可能性はある。
- (6) 『坐禪三昧經』（鳩摩羅什訳）……「行者定心求道時 常當觀察時方便 若不得時無方便 是應為失不為利 如犢未生犢牛乳 乳不可得非時故 若犢生已犢牛角 乳不可得無智故 如鑽濕木求出火 火不可得非時故 若折乾木以求火 火不可得無智故」（『大正藏』第一五卷、二八五下）。
- (7) 『大集月藏經』（那連提耶舍訳）……「於我滅後五百年中。諸比丘等猶於我法解脫堅固。次五百年我之正法禪定三昧得住堅固。次五百年讀誦多聞得住堅固。次五百年於我法中多造塔寺得住堅固。次五百年於我法中鬪諍言頌白法隱沒損減堅固」（『大正藏』第一三卷、三六三上）中）。
- (8) 『大集月藏經』、『正法念處經』、『觀仏三昧海經』か。
- (9) 念仏を相續する者は常に懺悔しているに等しいということ。念仏による滅罪を意味しており、『觀無量壽經』の九品にそれぞれ説かれているごとく、念仏の行人は意図的に懺悔する必要はなく、仏の名を称えることでおのずから滅罪されるという經説である。これは念仏と懺悔が同じ行という意味ではなく、あくまでも念仏と懺悔には滅罪という共通の功德があるということである。
- (10) ここに見られる「来」は語調を調える方向補語（趨向補語）であり、口語文獻にしばしば見られる。『安樂集』ではほかに「又来、但至彼国」、「又来、雖生兜率位」、「又来、但以一劫中」の合計四例がある。通常は動詞の前に置かれ「有聖教来証」や「以此諸經来驗」、「亦有經文来証」がある。同じ用法は善導の『觀經疏』や『往生礼讃偈』でも、「来破」「来証」「来明」「来報」「来潤」「来応」「来問」「来収」などが見られる。いずれにしても、今まさに積極的に何かを行おうとする意志や状況を示したり、なにもものかこちら側に向かっている状態や向かって来る動作を表す場合に用いられる。
- (11) 良忠の『安樂集私記』巻上には、前者とは『大集月藏經』の第一と第二であり、後者は第四、第五であるとする（『浄全』第一卷、七一四上）。
- (12) 「痛焼」とは『無量壽經』に出る「五痛五焼」（『大正藏』第十二卷、二二七中）の略語と考えられる。
- (13) 『大集經』（曇無讖訳）……「自於己身生醫師想。於所說法生良藥想。於聽法者生疾苦想。於如來所生善友想。於正法中生常恒想。若能如是說正法時。其處四邊各一由旬魔不能到」（『大正藏』第一三卷、七三下）。
- (14) 『大智度論』（鳩摩羅什訳）……「聽者端視如渴飲 一心入於語議中踊躍聞法心悲喜 如是之人應為說」（『大正藏』第二五卷、六三中）。
- (15) 『大智度論』（鳩摩羅什訳）……「舍利弗言、佛説二人得福無量、一心說者、一心聽者」（『大正藏』第二五卷、二六七中）。
- (16) 『無量壽經』（康僧鎧訳）……「若人無善本 不得聞此經 清淨有戒者 乃獲聞正法」（『大正藏』第一二卷、二七三上）。

- (17) 『無量寿経』(康僧鎧訳)……「奉事億如來 飛化遍諸刹 恭敬歡喜去 還到安養國 若人無善本 不得聞此經 清淨有戒者 乃獲聞正法 曾更見世尊 則能信此事 謙敬聞奉行 踊躍大歡喜 憍慢弊懈怠 難以信此法 宿世見諸佛 樂聽如是教」(『大正藏』第十二卷、二七三上中)。
- (18) 『無量清淨平等覺経』(支婁迦讖訳)……「佛言、其有善男子、善女人聞無量清淨佛聲、慈心歡喜、一時踊躍、心意清淨、衣毛為起拔出者、皆前世宿命作佛道。若他方佛故、菩薩、非凡人。其有人民男子女人、聞無量清淨佛聲、不信有佛者、不信佛經語、不信有比丘僧、心中狐疑都無所信者、皆故從惡道中來、生愚蒙不解宿命、殃惡未盡、未當得度脱、故心中狐疑不信向耳」(『大正藏』第十二卷、二九九中下)。
- (19) 『無量寿経』(康僧鎧訳)……「憍慢弊懈怠 難以信此法」(『大正藏』第十二卷、二七三中)。
- (20) 総目の「欲使時會聽衆力勵發心」という一文を略している。
- (21) 諸本には「熙連」とあり、『大般涅槃経』にも「熙連河沙」とあるが、底本に従う。
- (22) 『大般涅槃経』(曇無讖訳)……「爾時佛讚迦葉。善哉善哉。善男子。汝今善能問如是義。善男子。若有衆生於熙連河沙等諸佛所發菩提心。乃能於是惡世受持如是經典不生誹謗。善男子。若有能於一恒河沙等諸佛世尊發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是法愛樂是典。不能為人分別廣說。善男子。若有衆生於二恒河沙等佛所發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是法。正解信樂受持讀誦亦不能為他人廣說。若有衆生於三恒河沙等佛所發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是法。受持讀誦書寫經卷雖為他說未解深義」(『大正藏』第十二卷、三九八下)。
- (23) 「教量」とは、『大般涅槃経』で説く仏に奉持した時間に応じて受けた教えの分量のことを指すと考えられる。『大般涅槃経』では半恒河沙から三恒河沙という供養の期間に応じて經典に対する態度、理解に相異がある。
- (24) 『大般涅槃経』(曇無讖訳)……「又善男子。是大涅槃微妙經典所流布處。當知其地即是金剛。是中諸人亦如金剛。若有能聽如是經者。即不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。隨其所願悉得成就」(『大正藏』第十二卷、三九八中)。
- (25) 真如、実相、第一義空の境界を成就する為の行を意味する。
- (26) 『觀仏三昧海経』(仏陀跋陀羅訳)……「復次父王。譬如伊蘭俱與梅檀。生末利山。牛頭栴檀生伊蘭叢中。未及長大。在地下時芽莖枝葉。如閻浮提竹筍。衆人不知。言此山中純是伊蘭無有梅檀。而伊蘭臭。臭若臙屍薰四十由旬。其華紅色甚可愛樂。若有食者發狂而死。牛頭栴檀雖生此林未成就故。不能發香。仲秋月滿卒從地出成梅檀樹。衆人皆聞牛頭栴檀上妙之香。永無伊蘭臭惡之氣。佛告父王。念佛之心亦復如是。以是心故能得三種菩提之根」(『大正藏』第一五卷、六四六上中)。
- (27) 『大方廣仏華嚴経』(仏陀跋陀羅訳)……「譬如有人用師子筋以為琴絃、音聲既奏、餘絃斷絕。一切如來波羅蜜身、出菩提心功德音聲、若樂五欲二乘法者、聞悉斷滅。譬如牛、馬、羊乳合在一器、以師子乳投彼器中、餘乳消盡、直過無礙。如來師子菩提心乳、著無量劫所積諸業煩惱乳中、皆悉消盡、不住聲聞、緣覺法中」(『大正藏』第九卷、七七八下)。
- (28) 『大方廣仏華嚴経』(仏陀跋陀羅訳)……「善男子。譬如有入執翳身藥、一切衆生所不能見。菩薩摩訶薩亦復如是、得菩提心翳身藥者、一切諸魔所不能見」(『大正藏』第九卷、七七七中)。
- (29) 『安樂集私記』卷上には、五節、六節が示されていないことについて、「五六二段上標釈故今文無之」(『浄全』第一卷、七一八下)と説明されている。
- (30) 『大乘同性経』(闍那耶舍訳)……「復有阿彌陀如來。蓮花開敷星王如來。龍王如來。寶德如來。有如是等生淨佛刹所得道者。彼諸如來得初佛地。如來在此地中作是神通。如我今日神通無異。(…中略…)。佛言。善丈夫。若欲身彼佛報者。汝今當知。如汝今日見我現諸如來清淨佛刹現得道者當得道者。如是一切即是報身。海妙深持自在智通菩薩復問佛言。世尊。何者名為如來應身。佛言。善丈夫。猶若今日踊步捷



如來。魔恐怖如來。大慈意如來。有如是等一切彼如來。穢濁世中現成佛者當成佛者。如來顯現從兜率下。乃至住持一切正法一切像法一切末法。善丈夫。汝今當知。如是化事皆是應身。海妙深持自在智通菩薩復問佛言。世尊。何者名為如來法身。佛言。善丈夫。如來真法身者。無色無現無著不可見。無言說無住處無相無報。無生無滅無譬喻。如是善丈夫。如來不可說身。法身智身。無等身。無等等身。毘盧遮那身。虛空身。不斷身。不壞身。無邊身。至真身。非虛假身。無譬喻身。是名真身」(『大正藏』第十六卷、六五一中～六五一下)。

(31) 『觀世音菩薩授記經』(曇無竭訳)……「阿彌陀佛正法滅後、過中夜分明相出時、觀世音菩薩、於七寶菩提樹下、結跏趺坐、成等正覺、號普光功德山王如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊」(『大正藏』第二卷、三五七上)。

(32) 『觀世音菩薩授記經』(曇無竭訳)……「佛涅槃後、或有衆生不見佛者、有諸菩薩、得念佛三昧、常見阿彌陀佛」(『大正藏』第一二卷、三五七上)。

(33) 『究竟一乘寶性論』(勒那摩提訳)……「受樂佛如是 神通力自在 此神力自在 略說有五種 說法及可見 諸業不休息 及休息隱沒 示現不實體 是名要略說 有五種自在 如摩尼寶珠 依種種諸色 異本生諸相 一切皆不實 如來亦如是 方便力示現 從兜率陀退 次第入胎生」(『大正藏』第三卷、八四三上)。

(34) 『大般涅槃經』(曇無識訳)……「善男子。西方去此娑婆世界度三十二恒河沙等諸佛國土。彼有世界名曰無勝。彼土何故名曰無勝。其土所有嚴麗之。事皆悉平等無有差別。猶如西方安樂世界。亦如東方滿月世界。我於彼土出現於世。為化衆生故。於此界閻浮提中現轉法輪。非但我身獨於此中現轉法輪。一切諸佛亦於此中而轉法輪」(『大正藏』第二卷、五〇八下～五〇九上)。

(35) 『阿彌陀鼓音声王陀羅尼經』(失訳)……「阿彌陀佛與聲聞俱。如來應正遍知。其國號曰清泰。聖王所住。其城縱廣十千由旬。於中充滿利利之種。阿彌陀佛如來應正遍知。父名月上轉輪聖王。其母名曰殊勝妙

顏。子名月明。奉事弟子名無垢稱。智慧弟子名曰賢光。神足精勤名曰大化。爾時魔王名曰無勝。有提婆達多。名曰寂靜」(『大正藏』第二卷、三五二中)。

(36) 『大方廣華嚴經』(仏陀跋陀羅訳)……「猶如見導師、種種無量色、隨衆生心行、見佛刹亦然」(『大正藏』第九卷、四一五中)。

(37) 『淨土論』の著者に關しては、同文が『釈淨土群疑論』一(『大正藏』第四七卷、三四下)に引用されており、ここでは「如安法師淨土論說」、「安法師慧悟開明神襟俊爽」(中略)実為印手菩薩」とあることから、東晋の釈道安(三一―三八五、弥天の道安)だとする説がある。それに対し、北周の釈道安(一五八〇、姚氏道安)とする説もある。この『淨土論』著者問題に關する最新の研究として、工藤量導「慧影『大智度論疏』引用の道安『淨土論』について―東晋・北周いづれの道安か―」(『印仏研』六五―一、二〇一六)がある。

(38) 「機感」…「機」「感」いづれも衆生からの仏菩薩に対する働きかけのこと。例えば、智顗は『法華玄義』において「而經中機語緣語、並是感之異目」と述べている(『大正藏』第三三卷、七四六下)。

(39) 『大乘同性經』を引用して三身を解説する際に、『大乘同性經』では「真身」とするところを、「真法身」としていることから、ここでの「真」とは真法身のことである。

(40) 『四分律』の原文では「提婆拔提城」とある。

(41) 『四分律』(仏陀耶舎・竺仏念共訳)……「時定光如來。去提婆拔提城不遠。化作一大城。高廣妙好。懸繪幢幡。處處剋鏤。作衆鳥獸形。周匝淨妙浴池園果。勝於提婆拔提城化作人民顏貌形色。亦勝彼國人民。使已國人民共與往來交接為親友。賈人當知。定光如來。觀察提婆拔提城人民諸根純熟即使化城忽爾火然。時提婆拔提城人見此已。極懷愁憂厭離心生」(『大正藏』第二十二卷、七八三上)。

(42) 『維摩詰所說經』(鳩摩羅什訳)……「或現劫盡燒、天地皆洞然、衆人有常想、照令知無常」(『大正藏』第一四卷、五五〇上)。

(43) 『維摩詰所說經』(鳩摩羅什訳)……「諸有貧窮者、現作無盡藏、因

以勸導之、令發菩提心」(『大正藏』第一四卷、五五〇中)。

- (44) 『觀世音菩薩授記經』(曇無竭訳)……「阿彌陀佛法滅後、過中夜分明相出時、觀世音菩薩、於七寶菩提樹下、結加趺坐、成正覺、號普光功德山王如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊」(『大正藏』第一二卷、三五七上)。

- (45) 『無量壽經』(康僧鎧訳)……「彌勒菩薩白佛言、世尊、於此世界有幾所不退菩薩生彼佛國。佛告彌勒、於此世界有六十七億不退菩薩往生彼國。一一菩薩已曾供養無數諸佛、次如彌勒者也。諸小行菩薩及修習少功德者不可稱計、皆當往生。佛告彌勒、不但我刹諸菩薩等往生彼國、他方佛土亦復如是」(『大正藏』第一二卷、二七八中下)。

- (46) なお本来、經典では文殊師利は阿難に対して言葉を発しているが、『安樂集』は釈迦に改変している。釈迦に対して「当知」という言葉を用いることは不自然であるので、訳文には反映させなかった。

- (47) 底本は「勤」とあるが、文脈から判断して「勤」の意で読解した。

- (48) 『觀仏三昧海經』(仏陀跋陀羅訳)……「佛告文殊。速説勿疑。文殊師利告諸大衆。對尊者阿難。阿難當知。我念過去無量數劫。復倍是數不可思算阿僧祇劫。彼世有佛名寶威德如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。彼佛出時衆生弊惡與今無異。彼佛世尊亦長丈六身紫金色。説三乘法如釋迦文。爾時彼國有大長者。名一切施。長者有子名曰戒護。在母胎時母信敬故。豫為其子受三歸依。子既生已年至八歲。父母請佛於家供養。童子見佛安行徐步足下生華有大光明。見已歡喜為佛作禮。禮已諦觀目不暫捨。一見佛已即能除却百萬億那由他劫生死之罪。從是已後。恒得值遇百億那由他恒河沙佛。於諸佛所殖衆德本。是諸世尊皆説如是觀佛三昧。亦讚白毫大人相光。勸多衆生懺悔係念。過是已後復得值佛。名摩尼光多陀阿伽度阿羅呵三藐三佛陀。摩尼光佛出現世時。常放光明以作佛事度脫人民。如是二萬佛皆同一號名摩尼光。時諸世尊皆以化佛微妙光明誘接衆生。次復有佛名栴檀摩尼光。十號具足。如是百億佛皆號摩尼光。是諸世尊誓願力故。正以眉間白毫相光。覆護衆生除滅衆罪。復有佛出名栴檀海如來應供正遍知。

如是百萬佛皆同一字名栴檀海。是諸世尊。以胸德字卍字印光化度衆生。時彼童子親侍諸佛間無空缺。禮拜供養合掌觀佛。觀佛功德因緣力故。復得值遇百萬阿僧祇佛。彼諸世尊亦以身色化度衆生從是已後即得百千億念佛三昧。得百萬阿僧祇旋陀羅尼。既得此已諸佛現前說無相法。須臾之間得首楞嚴三昧。時彼童子受三歸依。一禮佛故諦觀佛相心無疲厭。由此因緣值無數佛。何況係念具足思惟觀佛色身。時彼童子豈異人乎。今我身是。爾時世尊讚文殊師利言。善哉善哉。文殊師利。乃於昔時一禮佛故。得值爾許無數諸佛。何況未來我諸弟子勤觀佛者。佛勅阿難。汝持文殊師利語。遍告大衆及未來世衆生。若能禮拜者。若能念佛者。若能觀佛者。當知此人與文殊師利等無有異。捨身他世。文殊師利等諸大菩薩為其和上」(『大正藏』第一五卷、六八七下六八八中)。

- (49) 「縁」……「信仏因縁」の意で解釈した。第二大門第二において「自有中下之輩、未能破相。要依信佛因縁求生淨土。雖至彼國、還居相土」(『大正藏』第四七卷、九上)とある。

- (50) 『往生論』と『往生論註』の文が混在している。『往生論』(菩提流支訳)……「又向説佛國土功德莊嚴成就。佛功德莊嚴成就。菩薩功德成就。此三種成就願心莊嚴。略説入一法句故。一法句者。謂清淨句。清淨句者。謂真實智慧無為法身故。此清淨有二種應知。何等二種。一者器世間清淨。二者衆生世間清淨。器世間清淨者。向説十七種佛國土功德莊嚴成就。是名器世間清淨。衆生世間清淨者。如向説八種佛功德莊嚴成就。四種菩薩功德莊嚴成就。是名衆生世間清淨。如是一法句。攝二種清淨應知」(『大正藏』第二六卷、二三二中)。「往生論註」……「略説入一法句故、上國土莊嚴十七句如來莊嚴八句菩薩莊嚴四句為廣。入一法句為略。何故示現廣略相入。諸佛菩薩有二種法身。一者法性法身。二者方便法身。由法性法身生方便法身。由方便法身出法性法身。此二法身異而不可分。一而不可同。是故廣略相入統以法名。菩薩若不知廣略相入。則不能自利利他。一法句者謂清淨句清淨句者謂真實智慧無為法身故此三句展轉相入。依何義名之為法。以清淨故。依何義名為清淨。以真實智慧無為法身故。真實智慧者實相智慧也。實相無相故真實智



無知也。無爲法身者法性身也。法性寂滅故法身無相也。無相故能無不相。是故相好莊嚴即法身也。無知故能無不知。是故一切種智即眞實智慧也」(『大正藏』第四〇卷、八四一中)。「如是者。如前後廣略皆實相也。以知實相故則知三界衆生虛妄相也。知衆生虛妄則生眞實慈悲也。知眞實法身則起眞實歸依也」(『大正藏』第四〇卷、八四二上)。

- (51) 「一法句」……「真理を表わす章句。転じて究極の真理そのものを意味する」(『佛教語大辭典』)。現今の研究成果では、章句の意味は原語にないことが明らかになっている。山口益『世親の浄土論 無量寿経優波提舍願生偈の試解』一五五頁(法蔵館、一九六三年)。松田和信「無量寿経論における「一法句」と「清浄句」」六九〜七八頁(『佛教大学総合研究所紀要別冊 浄土教の総合的研究』佛教大学総合研究所、一九九九年)。大竹晋校註『法華経論・無量寿経論 他』三五二〜三五三頁(『新国訳大蔵経』一四「釈経論部」一八、大蔵出版、二〇一一年)。

- (52) 「二種法身」……法性の法身が略(一法句)に相当し、方便の法身が広(二十九種莊嚴)に相当する。良忠『往生論註記』には「仏之自証は法性法身」(『浄全』第一卷、三三三下)として、仏の自内証が法性法身であるとしている。

- (53) 『安樂集』には「慈悲」とあるが、『往生論註』は菩薩が眞実の法身を知るとある。ここでは『往生論註』の理解に従う。

- (54) 『往生論註』……「又向説觀察莊嚴佛土功德成就莊嚴佛功德成就莊嚴菩薩功德成就此三種成就願心莊嚴應知 應知者。應知此三種莊嚴成就由本四十八願等清淨願心之所莊嚴。因淨故果淨。非無因他因有也。略説入一法句故 上國土莊嚴十七句如來莊嚴八句菩薩莊嚴四句為廣。入一法句為略。何故示現廣略相入。諸佛菩薩有二種法身。一者法性法身。二者方便法身。由法性法身生方便法身。由方便法身出法性法身。此二法身異而不可分。一而不可同。是故廣略相入統以法名。菩薩若不知廣略相入。則不能自利利他。一法句者謂清淨句清淨句者謂眞實智慧無為法身故 此三句展轉相入。依何義名之為法。以清淨故。依何義名

為清淨。以眞實智慧無為法身故。眞實智慧者實相智慧也。實相無相故眞智無知也。無為法身者法性身也。法性寂滅故法身無相也。無相故能無不相。是故相好莊嚴即法身也。無知故能無不知。是故一切種智即眞實智慧也。以眞實而目智慧。明智慧非作非非作也。以無為而標法身。明法身非色非非色也。非於非者豈非非之能是乎。蓋無非之曰是也。自是無待復非是也。非是非非百非之所不喻。是故言清淨句。清淨句者謂眞實智慧無為法身也。此清淨有二種應知 上轉入句中。通一法入清淨。通清淨入法身。今將別清淨出二種故。故言應知。何等二種一者器世間清淨二者衆生世間清淨器世間清淨者如向説十七種莊嚴佛土功德成就名器世間清淨衆生世間清淨者如向説八種莊嚴佛功德成就四種莊嚴菩薩功德成就就是名衆生世間清淨如是一法句攝二種清淨義應知 夫衆生為別報之體。國土為共報之用。體用不一所以應知。然諸法心成無餘境界。衆生及器復不得異不得一。不一則義分。不異同清淨。器者用也。謂彼淨土是彼清淨衆生之所受用故名為器。如淨食用不淨器。以器不淨故食亦不淨。不淨食用淨器。食不淨故器亦不淨。要二俱潔乃得稱淨。是以一清淨名必攝二種。問曰。言衆生清淨則是佛與菩薩。彼諸人天得入此清淨數不。答曰。得名清淨非實清淨。譬如出家聖人以殺煩惱賊故名為比丘。凡夫出家者持戒破戒皆名比丘。又如灌頂王子初生之時。具三十二相即為七寶所屬。雖未能為轉輪王事亦名轉輪王。以其必為轉輪王故。彼諸人天亦復如是。皆入大乘正定之聚。畢竟當得清淨法身。以當得故得名清淨。善巧攝化者。如是菩薩奢摩他毘婆舍那廣略修行成就柔軟心柔軟心者。謂廣略止觀相順修行成不二心也。譬如以水取影清靜相資而成就也。如實知廣略諸法 如實知者。如實相而知也。廣中二十九句略中一句莫非實相也。如是成就巧方便迴向 如是者。如前後廣略皆實相也。以知實相故則知三界衆生虛妄相也。知衆生虛妄則生眞實慈悲也。知眞實法身則起眞實歸依也」(『大正藏』第四〇卷、八四一中—八四二上)。

- (55) 「習」は『安樂集私記』では薰習の意とする(『浄全』第一卷、七二四上)。

(56) 『大智度論』(鳩摩羅什訳)……「如是世界在地上、故不名色界、無欲故、不名欲界、有形色故、不名無色界」(『大正蔵』第二五卷、三四〇上)。

(57) 『往生論』(菩提流支訳)……「觀彼世界相 勝過三界道 究竟如虛空 廣大無邊際」(『大正蔵』第二六卷、二三〇下)。

(58) 『讃阿彌陀仏偈』……「南無至心歸命禮西方阿彌陀佛 妙土廣大超數限 自然七寶所合成 佛本願力莊嚴起 稽首清淨大攝受 願共諸衆生往生安樂國 南無至心歸命禮西方阿彌陀佛 世界光曜妙殊絶 適悅宴安無四時 自利利他力圓滿 歸命方便巧莊嚴」(『大正蔵』第四七卷、四二三上)。

(さいとう たかのぶ 研究員、仏教学部教授)

(そわ よしひろ 研究員、仏教学部准教授)

(かとう ひろたか 嘱託研究員、非常勤講師)

(ながた まさたか 嘱託研究員、佛教大学大学院博士後期課程満期退学)

(おがわ ほうどう 学術研究員、佛教大学大学院博士後期課程)